

「岩手県山田町ボランティア派遣 引率(参加)報告書」

1. 日時: 2011年6月24日(金)~6月27日(月)
2. 場所: 岩手県下閉伊郡山田町
3. 参加者: 22名(立命館大学学生) 内、班長は4名
6名(立命館大学教職員) 山口、山下、山本、段松、今川、竹林
23名(龍谷大学参加者学生) 内、リーダーは3名、班長は4名
4. ボランティア内容 沿岸部周辺住宅地域のガレキ撤去、溝掃除、地盤清掃
5. グループ構成
龍谷大学 4グループ 立命館大学 5グループ
6. スケジュール

2011年6月24日(金)

時間	内容	場所	備考
7:00	集合	京都駅	高速バスで移動
22:00	到着	岩手県花巻市(宿泊宿)	高速バスで移動

往路のバスには山口先生が乗車(職員5名は飛行機で向かい、現地にて待機)

2011年6月25日(土)

時間	内容	場所	備考
6:00	集合	宿泊先駐車場	前日は終日バスにて移動、22時過ぎに宿舎到着。
6:20	出発	—	朝食・昼食を宿泊先最寄のスーパーで調達、途中「遠野 風の丘(道の駅)」にて休憩
9:50	到着	山田町災害ボランティアセンター	ボランティア登録、活動内容の説明、グループ分け等 6/25はボランティア説明等時間を費やしたので事前に昼食を取ってからの作業となった
12:00	ボランティア活動開始	岩手県山田町大沢地区	ガレキの撤去(現地までは車で移動<10分間>) 沿岸部周辺に津波で流された住宅街がありそこに散乱しているガレキの撤去。溝の掃除など(大きなガレキは既に取り除かれており、細かいガラスの破片や木くずを撤去する)
15:30	ボランティア活動終了		ボランティアセンターに戻り、用具の洗浄、片付け、着替えを行う
17:10	宿泊地へ向け出発		夕食は宿泊先最寄のスーパーで購入
21:05	宿泊地に到着		各自食事・就寝

2011年6月26日(日)

時間	内容	場所	備考
5:50	集合	宿泊先駐車場	終日バスにて移動
6:05	出発	—	朝食・昼食は宿泊先最寄のスーパーで調達
9:30	到着	山田町災害ボランティアセンター	活動内容の確認(全グループ昨日と同じ場所・内容は同じ)
10:00	ボランティア活動開始	岩手県山田町大沢地区	ガレキの撤去(現地までは車で移動<10分間>) 沿岸部周辺に津波で流された住宅街がありそこに散乱しているガレキの撤去。溝の掃除など(大きなガレキは既に取り除かれており、細かいガラスの破片や木くずを撤去する)
12:00	ボランティアAM終了		昼食のため現地からセンターに移動

12:30	昼食	山田町災害ボランティアセンター	消毒等を行った上で、各自調達した昼食を取る。
13:30	ボランティア活動再開		ボランティアセンターにより現地へ送迎
15:30	ボランティア活動終了		ボランティアセンターに移動し、用具の洗浄、片付け、着替えを行う
16:30	北上へ向け出発		
19:50	北上に到着		スーパー銭湯にて入浴・夕食
21:00	北上→京都へ		2時間に一度トイレ休憩
9:00	京都駅に到着	京都駅	解散

7. ボランティア内容

(1) 事前説明会 (6/21 衣笠、6/22 BKC)

ボランティアに参加するにあたってのリスクの説明

怪我、余震、感染症、精神的なダメージ、無理は絶対にしないこと

山田町のボランティアを取り巻く状況についての説明

龍谷大学 深尾ゼミと合同でボランティア活動にあたる旨の説明

- ・ 今回は龍谷大学によるボランティアバスの運行に連動させてもらうことになり、共同でボランティアを行う旨の説明

被災地に対しての配慮 (写真の許可、自覚のある行動)

男女の役割の説明 (男は大型ガレキ撤去といった力仕事、女性は小物を扱う等) 力仕事だけが全てでないことを強調される

全体のボランティア活動の流れ説明

必要持参物についての説明

(2) ボランティア活動 (6/25、6/26)

活動項目: アパート1階部分の泥かき

グループ構成: 立命館 5~6名×5グループ (各グループに班長1名)

龍谷 5~6名×4グループ (各グループに班長1名)

内容: 山田町沿岸部の津波で流された家屋 (基礎のみ) のガレキの撤去

各グループにて割り当てられた家屋に散らばっているガレキやガラスの破片の撤去、及び家屋周りの溝の清掃 (泥のかき出し) を行う。この住宅街一帯は沿岸部より 20~30 メートルという位置にあるため、周辺の家屋はほぼ流されている状態であった。

近隣の住人の方が、ボランティアスタッフが使用できるよう屋外トイレ1箇所を開放下さった (男女別。男性用は扉なし、女性用は扉の変わりにシートで覆っている。酸素を送ることで水流の勢いを生む水洗トイレ)。

地面にあるガラスの破片やガレキの撤去のために土を掘れば掘るほど、様々なものが出てくる状況であった。ガラスの破片も多数土の中から出てくるため、スコップ等で掘る際、注意を要した。

ガレキの中でも木くず、ガラスの破片、その他のごみと分別袋に分けて活動を行った。

(3) 参加学生の振り返り・意見交換会 (7/5 衣笠、7/6 BKC)

参加学生を対象として振り返りと意見交換の機会を上記日程で実施した。全体としては、これまで何かしたいと思いながら行動には至っていなかった学生が個人で参加し、現地での活動を通して復興支援にどのように向き合うか考える契機となったようである。また現地での活動を通じて、集団行動の意義や、能動的な姿勢で物事に臨むことの重要性も感じていた。総じて、現場に赴き、他者と関わることを通じた教育的意義を大いに実感できるところであり、今後、正課・正課外を問わず教育的な取り組みとして積極的なプログラム化が必要となることが明らかとなった。

(全体的な感想)

- ・ やりがいと充実感をもって楽しく取り組めてよかった。
- ・ 被災した現地の方からお礼を言われて嬉しかった

- 仲間とのつながりの大切さを感じた
- 参加したメンバーと色々なことを語り合え、つながりを持ててよかった
- もっと体力的にも厳しいボランティアかと思っていたが、当初に想像していたよりも過酷ではなかった。
- 東北という遠方の関係で費用が厳しく、個人ではボランティアに参加することはできないと思っていたが、大学の援助のお陰で参加することができてよかった。
- 人間の強さを強く感じた。近所の方々とのつながりやコミュニティの大切さを感じた。
- もっと、被災地の方々と交流を持ちたかった。交流を持っているほかの学生がうらやましかった。
- ボランティア活動に参加できて嬉しい思いと、もっと良い活動ができたのではという悔しい気持ちが入り混じっている。
- 今回の活動を通じて、ボランティアへの認識が変わった。肩の力を張りすぎるのではなく、自分達にできることを少しずつ行う形でもいいと思った。
- 非常にやりがいを持って無理なく取り組める企画なので、また、このような企画があればぜひ参加したい。
- ボランティアに関心のある学生がまだまだ多いので、広報をより大々的に行ったらいいと思う。
- ボランティア参加者も現地の被災者の思いや大変さを知るために、風呂なしやテントのような形でもいいと思った。

(今後の課題)

- やることの指示(被災者からの突発的な依頼含む)が何点か変更して、戸惑った。
- がれきの分別方法がわかりづらかった。
- 事前説明会の際に参加学生同士が連絡先を交換できていれば、事前の物品購入の情報などが交換できてよかった。
- 訪問する被災地の状況について、行く前にもっと知りたかった(自分でも調べておくべきだった)
- 龍谷大学の学生ともっと交流も持ちたかった。
- 必要購入物の中で、継続的使用可能なもの(金属中敷など)や購入しにくいものは大学で一括購入してほしい。
- 参加者のモチベーションを更に上げる必要がある。途中、だらだらと行動したりする点があった。もっと、テキパキと行動することが必要。自覚が少し欠けている時があった。
- 移動時間をより有効に利用して、コミュニケーションや活動の内容を把握できればよかった。
- 立命館の学生のリーダーシップが龍谷の学生に比べて欠けていた。
- 宿泊先と被災地との距離が長く、移動が大変であった。被災地により近い方が、その分、ボランティア活動に割り当てられるのでいいと思う。
- 人数の規模によっては、バスではなく、新幹線での移動なども検討してはどうか。

(4)引率教職員のミーティング(7/5 朱雀 - 衣笠)

- ボランティア現場のニーズは日々変わっており、活動内容の指示を受ける際、待機することや効率的に動けないこともある旨、学生に伝える必要がある。
- 事前教育を充実させ、現地の状況や活動内容、チームワークの大切さ、事前に参加者同士が仲良くなれる工夫作りが必要。
- 教育的効果を高めるため、大学としてのテーマを事前に定め、参加することへの目的を学生に伝えていくことが必要。
- ボランティアに対しての過度な期待とギャップを防ぐため、事前の心構えをより学生に伝えておく必要がある。
- ボランティア作業をする際、自分の作業のみならず、特にリーダーが人を動かしてい

くのか、学生に考えさせてあげる教育が必要。

- バスのプレートが「龍谷大学深尾ゼミ」と記載されており、立命館大学の学生は若干の違和感を抱いていた。高速道路のパーキングエリアでは、意外とボランティアバスに関心のある方々も多いので、自然と本学の学生がボランティアをしているという広報をできるプレートが欲しい。
- 安全対策で1日目は緊張感を持って活動しているが、二日目は慣れのせいもあり、暑さのため帽子やマスク、ゴーグルを外して活動する学生が増えた。安全対策を改めて徹底するべき。
- ボランティアに参加した学生に対して、「ここまでしかできなかった」ではなく、「ここまでできた」というように思ってもらえるため、教職員のサポートが必要。
- 限られた情報の中で作業をする難しさや、日本人として助け合いの心の尊さ、また、このような活動を一時的ではなく、継続的に行う仕組みづくりが重要。
- 緊迫感ではなく、良い緊張感を持って学生にボランティア活動ができるよう、教職員で更にサポートしていく。

8. 今回の派遣を通じた到達点と課題

(1) 何かしたいが行動には至っていない学生の参加機会

今回は立命館大学としては初となるボランティアバスを、京都災害ボランティア支援センターの協力のもと、龍谷大学の深尾ゼミと共同で運行し、当初目標としていた被災地でのボランティアを行う学生の後押しをすることはできた。参加学生のモチベーションは非常に高く、被災地で活動することによって、今後自分達がどのような形で貢献していくことができるのかを活動終了後にも深く考えている学生が多くみうけられた。実際、被災地で被災者同士で助け合い、ガレキ等の撤去作業をする方々をみて、コミュニティや仲間の大切さを学んだと回答する学生も多かった。

(2) 派遣の目的の明確化と学生への動機付け

引率した教職員から共通して出されたのが、派遣目的を学生に明確に伝え、動機付けすることの重要性であった。今回は、募集期間が実質3日間であったため、教育プログラムとして練られた企画とはならず、事前研修は説明会と心構え、現地の情報提供にとどまった。学生自身も準備物をそろえ、体調を管理するのが精一杯の状況であったため、学生の参加意欲をさらに喚起するという点では改善の余地も多かった。また、参加者全員には事前説明会等で、被災地へのボランティアをするにあたり、過度な期待とそのギャップを避けるため、現地でのニーズが刻一刻と変化している現状や、当日に指示を受けるため、待機や効率的に動けないこともある旨を従来以上に伝えておく必要がある。

(3) 教育プログラムとしての企画運営

事前研修の重要性、チームとして活動する意識の醸成の必要性

引率した教職員、参加した学生から共通して出されたのが事前教育の重要性である。今回は、募集期間の関係もあり現地に到着してからグループ分けしてグループリーダーを決めたため、チームでのまとまりのある活動ができたグループとそうでないグループに差がみられた。1日目の活動終了後に宿舎でのミーティングを予定していたが、渋滞のため到着が遅れ、実施できなかったが、1日目の活動の振り返りと翌日にむけた修正が出来れば、一定の修正は可能であった。

次回以降は事前にグループリーダーを決め、事前教育を実施することで、モチベーションやコミュニケーション、安全指導、メンバーへの心の配り方、リーダーへのフォローなどチームとしての活動、移動中の機敏な対応など、プログラムの精緻化が必要がある。

活動の振り返りの取り組みの重要性

ボランティア終了後にはグループごとに意見交換会を設け、活動を通じて感じたことや改善点、今後、現地との関係をどのように持っていくべきかなど考える場など、教育的効果を促していける場の提供が必要である(上述のとおり、今回は実施予定であったが、交通渋滞のため宿泊先への到着が遅れ、未実施)。そのような場を提供することで参加間での絆が更に深まり、他大学と今後共同で活動を実施する場合もネットワークが広がり、高め合う関係が醸成される。

安全対策等講習会・研修等の実施

ボランティアを安全に怪我なく終えるために、参加学生への安全講習を徹底する必要がある。

気の緩み、慣れなどを持ち始めた際は、特に危険が生じる可能性が高いため、チームとしての声かけや気配りの重要性を伝える機会が重要だ。その際、ボランティア活動において、無理はタブーであり、疲れた際には個人でも休憩をしやすい環境づくりの大切さを予め伝えておきたい。

以 上

ボランティア活動の現場（防波堤の上より）



活動風景



活動風景



活動風景



活動風景



散乱しているガラスの破片



活動後



トイレ

